

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 5 月 7 日現在

機関番号：12605

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25380735

研究課題名(和文) イヌを介在した社会復帰教育が受刑者の社会性に及ぼす影響

研究課題名(英文) Effects of dog-assisted education for rehabilitation of prisoners on their sociability

研究代表者

甲田 菜穂子 (Koda, Naoko)

東京農工大学・(連合)農学研究科(研究院)・准教授

研究者番号：90368415

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：知的障害、精神疾患を抱える受刑者を対象とした市民参加による訪問型イヌ介在プログラムを発展させ、社会復帰のための更生教育におけるイヌとのふれあいが、受刑者のストレス、感情やコミュニケーションスキルに与える効果を検証し、プログラムの構造を明らかにした。このプログラムは、対象者自身および実践者によって心理社会的効果があると評価された。また実践側に過度な負担がかかるものではなかった。

研究成果の概要(英文)：A dog-visiting program provided by citizens was improved for the inmates with mental retardation and/or psychiatric problems as a rehabilitation program for stress management and communication training in a prison. Effects of the program were examined on stress, emotion and communication skills of the inmates. Moreover, structure of the program was clarified. The program was evaluated as psychosocially effective by both the inmates and the dog handlers. In addition, the program did not burden excessively on the dogs and their handlers.

研究分野：社会科学

キーワード：社会福祉関係 ストレス コミュニケーション 動物

### 1. 研究開始当初の背景

現在の日本では、犯罪件数は減少してきているものの、再犯率は依然として高い。これは、犯罪者の矯正がうまく機能しない場合があり、限られた人が繰り返し犯罪を行なっているということである。刑務所内の様相も変化してきており、被収容者の高齢化と共に、社会復帰のための教育や支援が必要な者が増加している。特に、知的障害者や精神障害者による犯罪に関しては、健常者と同じ処遇ではあまり更生が望めなかった。また、受刑者の社会復帰を阻害する要因には、更生教育や福祉的支援の不足だけでなく、依然として、情報不足や偏見からくる社会での受け入れ拒否が指摘されている。一度、不幸にも道を踏み外してしまったら、刑期を終えても、容易に社会復帰することができないのである。

近年、司法福祉の中での受刑者の処遇についての考え方は大きく変換し、法務省は、一連の刑務所改革の中で、官と民が互いの強みを持ち寄って協働する更生教育をこれまで以上に推進するようになった。様々な改善策が行なわれている中で、市民参加型の本研究は、事態の改善に寄与できる可能性があり、受刑者の更生教育プログラムの開発を行なってきた。すなわち、通常の訓練に乗りにくい知的障害や精神疾患のある受刑者には、社会復帰に向けた具体的な訓練に入る前段階の基幹教育が必要であり、様々な対応が可能なイヌを用いて対人関係を円滑に促すプログラムを作成した。伝統的に動物利用の習慣の少ない日本人と動物の関係や、刑務所と社会の接点を作る意味からも、市民による訪問型プログラムの有効性は大きいと考えたためである。

本研究のように、人の心身の健康増進、治療、教育などのために、動物を用いて効果をあげようとする実践は、動物介在介入と呼ばれる。人と動物の親和的な触れ合いが、補完代替療法や生活の質の向上といった領域で注目され、効果検証もなされてきた。動物との触れ合いには、人の血圧の降下や医療機関への受診回数の減少といった身体的効果、抑うつや自尊心の高揚などの心理的効果、他者との会話の増加や人間関係の改善などの社会的効果が証明されている。

刑務所における動物を用いた社会復帰プログラムは、欧米では職業訓練や社会適応訓練(SST)として取り入れている施設がある。職業訓練では、社会復帰後に動物関連の職業に就けるように動物の飼育や訓練、生産の技能を身につけさせている。また、犯罪に至った原因が受刑者の社会的技能の低さにあると考え、動物との触れ合いによるコミュニケーションスキルの向上やストレスマネジメントを社会適応訓練と捉えている。それらの効果としては、釈放後に動物関連の職業に就く者がいることや、受刑者の攻撃性の減少や自尊心の向上などが挙げられ、他のアニマルセラピーの効果の様相と根本は異なる。

実践が比較的ある欧米であっても、科学的な取り組みはほとんどないが、受刑者更生という困難な取り組みの中では、動物を介在させて少しでも効果をあげようという試みは魅力がある。本研究では、グループワークを取り入れ、受刑者同士が学び合い、助け合う状況設定をすると同時に、イヌのハンドラーからも受刑者に対してきめ細かい対応が提供できるようにした。

本プログラムのこれまでの実践は、対象者となった受刑者のみならず施設、マスコミからも好評を得た。そして、イヌ介在による受刑者の心理社会的効果が確認できた。セッションの前後を統計的に比較したときには、イヌとの触れ合いによって対象者は、気分が前向きになり、ストレス指標となるコルチゾル値が減少した。ハンドラーによる対象者評価でもその効果が確かめられた。ただし、受刑者は他者や社会のこと、自分の現在の状況や過去のことと向き合うことは、抑制されやすかった。また、他人に対してはあまりできないが、イヌという他者への内面への言及は多くあり、潜在能力はあるものの、他人への明確な配慮は発現が遅れ、全般に生起も少なかった。つまり、イヌとの友好的な関係から良好な対人関係に移行を促す段階の課題として残った。そのため、本研究は、プログラムを改良し、新たな評価指標を加えて、実践とその効果検証を行なった。

### 2. 研究の目的

知的障害や精神疾患のある受刑者を対象とした市民による訪問型イヌ介在プログラムを発展させ、社会復帰のための更生教育におけるイヌとの触れ合いが、受刑者の心理やコミュニケーションスキルに与える影響を質問紙調査により検証した。同時に、実践側への福祉的配慮として、毎回の実践において、イヌとハンドラーのストレスについての質問紙調査も実施し、過度な負担がかからないようにプログラムをモニタリングした。

### 3. 研究の方法

刑務所において、知的障害あるいは精神疾患を抱えた男性受刑者に対して更生教育の一環として、イヌを用いた市民主催の訪問型集団活動を実施した。対象者 10 名のグループで、週 1 回 70 分間、12 回を 1 クールとしたイヌとの触れ合いであった。実践チームは、イヌとハンドラー、講師、コーディネーター、社会福祉士や臨床心理士で構成した。イヌとハンドラーは、事前に講習を受け、参加資格を得ていた。

実践内容は、イヌのしつけや世話など様々な関わり 6 項目を中心に講義と実習で構成した。同じ項目を 2 週続けて行ない、最初の週は基礎編、次週は前週の復習と発展内容であり、イヌとハンドラーの組も入れ替え、効果の定着を確実にした。全体での講義や活動だけでなく、集団を班分けし、ハンドラーが担

当する対象者を明確にし、きめ細かな観察と対応ができるようにした。更生教育として、イヌとの触れ合いによって対象者の緊張を解き、他者への配慮や円滑なコミュニケーションを促す技法を各実践に取り入れた。社会復帰後の生活を想定できるような話題も提供した。

プログラムの効果検証のために、各クールと各セッション前後に受刑者に対して、質問紙調査を行なった。クール前後に、対象者のストレス反応と自尊心の測定、セッション前後に気分測定を実施した。セッション後には、コミュニケーションに関する自己評定とセッションについての感想を求めた。ハンドラーは、各セッション後に担当対象者に関する実施記録を作成した。

実践側のストレスのモニタリングとして、ハンドラーは、セッション前後に自身とイヌのストレスを評価した。ハンドラーは、セッション後にイヌの行動評定も行なった。

#### 4. 研究成果

プログラムへの参加について、多くの対象者は事前から楽しみにしていたが、毎回のセッション後には、ほとんどの対象者が「楽しかった」、「説明が分かり易かった」など、肯定的な評価をし、本人の予想を上回る結果であった。対象者は、主要な気分得点の全てにおいて、セッション前と比べて、セッション参加後に有意な改善がみられた。ハンドラーも、対象者のイヌと人との相互交渉やセッション中に設定された課題への取り組みの姿勢を概ね肯定的に評価していた。本研究の改良版のプログラムは、旧プログラムと同等かそれ以上の効果が認められる結果となった。

一方で、対象者の自己評価、ハンドラーの対象者評価（他者評価）共に、他者との協調性や会話など、複雑で社会的技能を要する相互交渉については、評価項目の性質上、致し方ない面もあるが、やや低目の評価点を出していた。対象者の感想文の内容分析では、他者の内面や社会的事象に関する関心度には改善の余地が見られる事例もあった。また、気分の好転など、短期的な効果は顕著であったものの、それを長期的効果に固定したり、自尊心の高揚やストレス反応の軽減に転嫁させて行くには、さらなる工夫が必要であることが分かった。

そこで、特徴ある事例を分析した結果、対象者が経験した核となる出来事が、対象者の自己評価、ハンドラーの対象者評価に敏感に反映されたことが分かった。つまり、対象者個人の特徴や変化を敏感に捉え、支持的働きかけによって本人の動機づけを維持し、小さな肯定的変化に対しても承認・支持的な関わりを積み重ねることで、さらなる効果が期待できると示唆された。

実践側のモニタリングでは、ハンドラーとイヌのセッション中のストレスは、総じて問題がないレベルに収まっていた。ユニット作

業をしていた両者のストレスには関連が認められた。これらは、旧プログラムでの調査結果と同傾向であった。

本研究により、プログラムの実施による受刑者への心理社会的効果が確かめられた。プログラムは、ハンドラーやイヌに大きな負担をかけるものではなく、対象者とハンドラーの双方が本プログラムの有効性を評価していた。そして、対象者とハンドラーが、偏見を持たない温かなイヌを仲立ちにして、対等に相互交渉を行なう本プログラムでは、互いに身構えることが少なく参加できる利点もあった。本研究の成果を踏まえ、実践を蓄積し、細かな分析を進めて行きたいと考えている。

市民が対象者に寄り添う本研究のような支援方法は、受刑者の福祉向上やその後の円滑な社会復帰、ひいては人々が信頼と協力の元に共生できる社会の構築のため、大きな可能性がある。法務省やマスコミも成果を期待しているが、これは司法福祉の充実のみならず、多方面への波及効果が期待できるからである。日本社会に適合した政策立案には、日本からの科学的に評価される学術的報告が不可欠である。福祉学、心理学、農学分野の知見を集積し、さらに効果的なプログラムに改良して行きたい。

#### 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計4件)

甲田菜穂子 「これからのアシスタンス・ドッグに関するコメント」 『ヒトと動物の関係学会誌』、査読無(依頼原稿) 45、2016年、27-30.

Koda N., Watanabe G., Miyaji Y., Kuniyoshi M., Miyaji C. & Hirata T. "Effects of a dog-assisted intervention assessed by salivary cortisol concentrations in inmates of a Japanese prison" *Asian Journal of Criminology*, 査読有, 11(4), 2016, 309-319. DOI: 10.1007/s11417-016-9232-7

Koda N., Watanabe G., Miyaji Y., Ishida A. & Miyaji C. "Stress levels in dogs, and its recognition by their handlers, during animal-assisted therapy in a prison" *Animal Welfare*, 査読有, 24(2), 2015, 203-209. DOI: 10.7120/09627286.24.2.203

Koda N., Miyaji Y., Kuniyoshi M., Adachi Y., Watanabe G., Miyaji C. & Yamada K. "Effects of a dog-assisted program in a Japanese prison" *Asian Journal of Criminology*, 査読有, 10(3), 2015, 193-208. DOI: 10.1007/s11417-015-9204-3

〔学会発表〕(計9件)

Koda N., Miyaji Y., Yoda S., Arakawa K.,

Miyaji C. & Hirata T. "Evaluation of a dog-assisted program for inmates in a Japanese prison" The 31st International Congress of Psychology, 2016/7/27, Pacifico Yokohama (Yokohama, Kanagawa).

Koda N. "Animal assisted intervention program in a Japanese prison" 14th Triennial Conference of International Association of Human-Animal Interaction Organizations, 2016/7/12, Paris (France).

Koda N., Miyaji Y., Yoda S., Arakawa K., Miyaji C. & Sato M. "Handlers' evaluation of a dog-assisted program regarding social interactions in a Japanese prison" 14th Triennial Conference of International Association of Human-Animal Interaction Organizations, 2016/7/11, Paris (France).

甲田菜穂子・宝迪 「大学構内における安全・安心感」 日本心理学会第 78 回大会、2014 年 9 月 10 日、同志社大学（京都府京都市）。

甲田菜穂子 「イヌ介在療法が受刑者に与える影響」 日本社会福祉学会第 61 回秋季大会、2013 年 9 月 22 日、北星学園大学（北海道札幌市）。

甲田菜穂子・渡辺元・安達泰盛・宮地与志雄・宮地智恵美 「イヌ介在療法が受刑者のコルチゾルに与える影響」 日本心理学会第 77 回大会、2013 年 9 月 20 日、札幌コンベンションセンター（北海道札幌市）。

甲田菜穂子・宮地与志雄・渡辺元・石田周良・宮地智恵美 「動物介在療法がイヌに与える影響とハンドラーの認識」 日本動物心理学会第 73 回大会、2013 年 9 月 15 日、筑波大学（茨城県つくば市）。

Koda N., Miyazi Y., Kuniyoshi M., Watanabe G. & Miyazi C. "Psychological evaluation of a dog-assisted program in a prison by inmates and handlers" 13th Triennial Conference of International Association of Human-Animal Interaction Organizations, 2013/7/21, Chicago (USA).

Koda N., Miyazi Y., Adachi Y., Watanabe G. & Miyazi C. 2013. "Effects of a dog-assisted program on the mood in a prison and evaluation by dog handlers" 22nd Annual Conference of International Society for Anthrozoology, 2013/7/19, Chicago (USA).

〔その他〕

甲田菜穂子 「アニマルセラピーの実践と

研究が目指すもの」 日本アニマルセラピー心理学研究会シンポジウム、2014 年 3 月 15 日、梅花女子大学（大阪府茨木市）。

甲田菜穂子 「アニマルセラピーの心理学的研究の可能性と学生指導」 日本アニマルセラピー心理学研究会シンポジウム、2014 年 3 月 15 日、梅花女子大学（大阪府茨木市）。

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

甲田 菜穂子 (KODA NAOKO)

東京農工大学・大学院農学研究院・准教授  
研究者番号：90368415